次の 100 年
Next 100 Years

総務理事　茨木　久

学会 HP によると，本会の起源は明治 44 年（1911 年）に当時の逓信省電気試験所第 2 部に発足した「第 2 部研究会」に始まる．その後，大正 3 年（1914 年）に名称を「電信電話研究会」と改め会員を一般からも募集し活動が広がるようになり，大正 6 年（1917 年）に電信電話の学術技芸の研究，知識の交換および事業の振興を図ることを目的とする「電信電話学会」が創立され学会としての活動を開始した．以来，電子技術の急速な発展や社会の情報化の進展などの関連技術分野の拡大に伴い現在の「電子情報通信学会」へと変遷し，ほぼ 100 年間の長きにわたって活動を続けている．

それでは 100 年前はどのような時代であったのか？世界は第一次世界大戦の混乱の中，世界人口は 20 億人に満たない状況であったようである．19 世紀末から 20 世紀初頭は，自然科学，技術での様々な動きがあり，例えばアルベルト・アインシュタインによる特殊相対性理論，一般相対性理論の発表，マックス・プランクによる量子論の創始など物理学に大きな変革が起こっている．電気エネルギーが工業応用され産業に大きな影響を与え，電話，無線通信，ラジオなどが社会に広がっていく時代であった．

本会はこのような時代に産声を上げ，100 年間の間に現代の多くの人々の生活に密着する関連技術の発展に貢献している．

現在，世界人口は 70 億人，平均寿命も 70 歳を超える．今後，世界人口は 2100 年には 100 億人を突破すると予測されており，持続可能な社会という理念が提言されている．科学技術の研究開発の方向性も技術分野別推進から社会的な課題解決型へと変化する中，本会の関わる ICT は環境，資源，都市，流通，教育など様々な社会活動を一変させることのできる技術であり，本会の定款に定められた目的「電子工学および情報通信に関する学問，技術の調査，研究および知識の交換を行い，もって学問，技術および関連事業の振興に寄与すること」は，今後ますますその重要性が増すのではないだろうか．

本会の状況は数年来続く会員の減少など大きな課題を抱えている．一昨年度から進められていた学会の“あり方タスクフォース”などの活動の中で，今後の本会のあるべき姿が議論されている．インターネットやソーシャルメディアの急速な普及により，先述した本会定款の定める目的の実現形態も変わってくるであろう．

次の 100 年に向けて何をするか？　そこにはインベンション（発明）に加えてイノベーションが必要になると思われる．多種多様な技術領域の研究者，技術者が集い，様々な夢や洞察が融合して社会的に意義のある新たな価値を創造し，社会的に大きな変革をもたらす活動をけん引できるかが，今，学会に問われる重要な役割の一つではないだろうか．

100 年後の世界を正確に予測することは困難である．アルベルト・アインシュタインの「昨日から学び，今日を生き，明日へ期待しよう」との言葉にもあるように，今をしっかりと進めるとともに明日への期待を抱き，100 年後を夢見てこれまでの殻に閉じない幅広い研究者，技術者などの交流，意見交換の場を提供し，柔軟に形を変えていくことが求められるのではないか．